

【共同研究から】

サントペテルブルグのアイヌ資料調査 4

1995年から始まったロシア共和国サントペテルブルグ市内にある博物館所蔵のアイヌ関係資料の調査（SPb AINU PROJECT 研究代表者：千葉大学荻原眞子教授）は、本年度（8月2日～8月20日）のロシア民族学博物館（略称：REM）で行った約500点の資料調査と300点の写真複写をもって現地での作業をほぼ終了した。

REMでの過去2回の調査は、期間内に数多くの資料を調査するため、小型の資料を中心に作業を行った。そのため今回は残りの大型資料を中心に調査することとなった。その中には実物のクマ檻（組み立ては全員で半日かかりで行った）、2mほどもあるサハリンのイナウ、長さ約2.5mもあるクマの給餌器、糸や部品が付属する織機のセット（複数）、長さが4～5mもある莫産（複数）や柄を繋ぐと長さが28mもある滑走板付の銚などがあつた。作業には資料の出し入れ（上記の銚は計測を行う場所へ持ち出すだけでも数人が必要であつた）や計測が一人ではできないもの、時間がかかるものや、さらに写真撮影場所も狭いため連続で行えないものがあるなど、作業が効率よく進まないいくつかの問題もあつた。

しかし、調査も3年目となり、調査シートの様式を変更するなどして、現地での作業能率を上げることで予定の点数の調査を終了した。

さらに昨年までの資料の補足調査や、いくつかの資料については写真の再撮影も行った。

最後に博物館側と調査グループの双方で博物館の資料台帳との照合を行い、調査資料の確認を行った。

帰国後、調査シートや写真のチェックを行った結果、REMにおける3年間の調査で22コレクション、約2,750点の資料を調査したこととなった。そのうち17コレクション、約2,300点はワシーリエフが1912

年に収集した資料であつた。それらの地域別の資料数は以下のとおりである。

主な収集地（日本領時代の名称）	
◆サハリン 東海岸	オハコタン（白縫村箱田）
	シラロカ（白縫村白浦）
	アイ（栄浜村相浜）
	オタサン（栄浜村小田寒）
	トンナイチャ（富内村富内）
	オチョポカ（富内村落帆）
	ボリショイタコイ（落合町大谷）
	など13箇所 約800点
◆サハリン 西海岸	マウカ（真岡町真岡）
	タラントマリ（多蘭泊）
	2箇所 約500点
◆北海道	平取・二風谷 約1,000点



ワシーリエフの資料収集の記録では、1912年5月にサンクトペテルブルグを出発し、6月中旬に日本に到着、東京で通訳を見つけ、7月初旬に北海道を経由してサハリンへ渡り、豊原を中心に資料を収集する。7月12日に鉄道で（1911年に大泊から栄浜まで鉄道が開通）北へ向かい資料収集を始めている。さらにその北の地域へは馬車を使って資料収集をしながらオハコタンまで出かけ、そこから南下してトンナイチャ、オチョボカ（落帆）で資料を収集し、船で大泊を経て豊原へ戻り荷造りをする。さらに、大泊から船で西海岸のタラントマリ、マウカへ出かけ、馬車で豊原に戻る。栄浜と大谷で再度調査や写真撮影をして、8月14日に北海道（小樽）へ戻るまでの一ヶ月間で約1,300点の資料を収集している。

小樽を経由して函館で資料の船積みをした後、森、室蘭を経て平取へ出向き、河野常吉の案内によって8月19日から4日間で約1,000点の資料を収集し、函館に戻り、ウラジオストックを経て9月末にサンクトペテルブルグに帰る。

移動の日を除いて、ワシーリエフが実質的に資料収集に当たった日数は30日間ほどである。それにもかかわらず資料の数、種類とも多くのものを集めていることは、ワシーリエフがこういった民族資料の収集に習熟していたことと、資料の購入資金が豊富なことをうかがわせるものであろう。

本年度の調査には、荻原真子氏（千葉大学）吉田睦氏（千葉大学）佐々木利和氏（東京国立博物館）鈴木邦輝氏（名寄市北国博物館）藪中剛司氏（静内町郷土館）村木美幸氏（アイヌ民族博物館）小川久美子氏（モスクワ在住）田村将人氏（千葉大学）に当センターから古原敏弘が参加した。3年間の参加者は延べ30名である。

また、REMからは共同調査のメンバーとして毎年3人の職員が参加した。特に、今年は資料の再調査や再撮影で、すでに昨年までに調査が終了し保管されている資料を、離れた収蔵庫から資料番号を確認して、再度持ち出すという面倒な作業に労力を惜しまず協力してくれたことは感謝したい。

1995年から始まった、サンクトペテルブルグ市内の2つの博物館でのアイヌ資料調査では約4,100点のアイヌ民具資料を確認したこととなった。

内訳は1995、1996年の2ヶ年で調査したロシア科学アカデミー人類学民族学博物館（略称：MAE）の資料が約1,400点、1997～1999年の3ヶ年で調査を行ったREMが約2,750点である。

その大部分は時代、地域が特定でき、しかも日本国内には数少ないサハリンの資料が多数含まれることが判明したことは今回の調査の大きな成果である。これらの資料は20世紀初頭のアイヌ民具を考える上での基礎資料となりうるものである。

また、多くの資料に付けられたアイヌ語名称や用途などの説明も貴重な資料である。さらに、資料収集の際に良質なものを選択しており、芸術的価値の高い資料も多い。

今後は参加者でデータのとりまとめや、分析を行い報告をまとめることになっている。

* * *

なお、今年度の『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6号に荻原真子氏が翻訳した「B.ピウスツキのサハリン紀行」はMAEのアイヌ資料を収集した際の記録である。

古原敏弘（研究課・研究課長）

【フィールドからデスクから】

ウエペケレ イェ！イェ！ (昔話を言って！言って！)

アイヌの口承文芸を聞かせていただいたとき、私はその語り手に「いつ頃、どこで、誰から聞いたの？」と尋ねることにしています。このような背景を記録していない資料は、類話の比較や伝承地域の分布などを調べる際に困ります。詳しく聞きたい事柄ですが、当初の私は「五、六十年も前の体験を記憶している人は少ないだろう」と明確な解答が得られることをあまり期待せずに質問していたような気がします。

ところが、私に話を聞かせてくれる方々は、幼い頃に物語や歌を聞き覚えたときの様子をほんの数日前のことに答えられたのです。その思い出話を聞いていると、私もかつてはその空間にいたかのように錯覚することがあります。そのような思い出話の中から、北海道の日高地方に暮らしていらっしゃる二人の女性から伺ったことを紹介します。

Tさんの近所には、幼なじみのNさんとお婆さんが二人だけで暮らしている家がありました。Tさんはそこへ泊まりに行き、たくさんのアイヌ語を聞くことができました。姉妹のように仲が良いNさんと一緒にアイヌ語で「ウエペケレ イェ！イェ！（昔話を言って！言って！）」とお婆さんにねだりました。炉端で聞くこともありますが、布団の中でTさんとNさんとお婆さんを真ん中に挟んで川の字になって寝ながら聞きました。

翌朝、目覚めた二人へお婆さんは「は！このウェンカムイ ウタラ！モコロパ ワ イサム！（は！この悪いやつらめ。眠ってしまっ！）」と怒ったように言いましたが、二人の女の子はおかまひなしに、いつでも「ウエペケレ イェ！イェ！」とねだりました。しかし、残念なことにたくさん聞いたはずの物語は、結末を聞く前に眠ってしまったものが

多くて今ではよく覚えていません。最後まで語ることのできる物語の数が少ないのは、そんな理由があったからだといいます。自分たちが眠った後もお婆さんが語り続けていたのかどうか、まったくわからないと笑っていました。これは昭和初期の頃の話ですが、寄り集まった友達がそれぞれの得意な口承文芸を披露し合って楽しむようなことを昭和30年代には普通に行っていたそうです。

また、Nさんの娘さんの場合、ウエペケレをよく聞かされたのは田んぼや畑の中でした。Nさんが田植えをしながらウエペケレを語り始めると、娘さんはそれを聞きたいがために必死に母親の後をついて苗を植えました。そんなときのウエペケレはちょっとエッチな笑い話が多かったといいます。Nさんはアイヌ語をあまり理解できない娘さんのことを思って、アイヌ語の後に日本語の訳を聞かせてくれたそうです。娘さんは「その話が面白くて仕事も飽きないし、農作業もはかどった。母さんは頭がよかった」と懐かしがりました。これは昭和20年代後半のことです。

このように人それぞれにあった“語りの場”の様子を具体的に聞くことは大切だと思います。どのような雰囲気の中で語られていたのかを知ることで、私たちはアイヌの口承文芸をもっと身近なものとして捉えられる気がします。現在、アイヌの口承文芸は各種のイベントの“アトラクション”として、舞台上で演じられることが多くなってきました。日常生活の娯楽として存在していた時代のことを思い返すことは、今後の文化伝承のあり方を考えるための一つのヒントになると私は思うのです。

大谷洋一（研究課・研究職員）

【問い合わせあれこれ】(3)

<質問>「アイヌ人形」について教えてください

同じような内容の質問が毎年何件か寄せられます。他の関係機関にも尋ねてみたところ、同じような問い合わせがあるそうです。いずれも小学校の5、6年生か、その担任の方などからで、社会科で「日本各地の伝統産業」を学習する箇所があり、「アイヌ人形」を製造している工場の数や生産額等を教えて欲しい、というものです。

質問を下された方にうかがうと、「アイヌ人形」というのはアイヌの伝統的盛装の男女をかたどった木彫りの人形とのこと。つまりこの質問には、北海道に「アイヌ人形」という伝統産業品がある、ということが前提になっているのですが、回答はこの前提のところから説明が必要になります。

* * *

木彫りの人形は、現在、観光地や工芸展等でひろく見るができます。ただし、それらが製作されるようになったのは比較的新しいことと思われます。名称や姿形は様々で、「アイヌ人形」という呼称が特に定まっているわけではありません。

サハリン（樺太）のアイヌ文化には昔から木彫りの人形が見られます。網走には「ニポポ（ニポポ人形）」という木彫り人形の土産品がありますが、これはサハリンのアイヌが子どものお守りとして作ったものをモデルに製作されたのが始まりとされています。北海道のアイヌも古くから食器等の民具に文様を彫りこみましたが、人や動物をかたどった彫刻はあまり作られなかったようです。「写実的に生き物の形を作ると魂が宿ってしまうのでよくないのだ」という考え方はその理由の大きなものとされています。

比較的良好に知られている木彫りのクマは、大正時代ごろから八雲や旭川で副業や土産品として始まり広まったとされています。その後、昭和初期や戦後の北海道観光のブームなどを背景に、人形など様々

なものが彫られるようになったようです。なお現在土産品として販売されているものには、手作りのものもあれば機械を使うものもあります。また必ずしもアイヌの人々だけが作っているということでもありません。

* * *

小学校の教育課程が「伝統産業」として取り上げているのは、基本的には「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」（伝産法）で「伝統的工芸品」として指定されているもので、南部鉄器（岩手県）など百数十品目がこれに該当します。北海道には指定されているものはなく、参考書などに出版社の判断で「アイヌ人形」などのアイヌの木彫り工芸を載せる場合があるというのが、この質問の背景のようです。伝統的工芸品の指定を受けているのは、おおむね江戸時代から続くものですが、アイヌの木彫り工芸は、同じく古くからの伝統的な面を持ちつつ、明治・大正・昭和になって新たに工夫され加わった面も多く持っている、ということになります。

文化を学んだり説明したりする上では、それが昔から続くものなのか、それとも比較的新しい時代になって変わったり付け加わったりしたものなのかを意識しておくことも必要だと思いますので、冒頭の質問については以上のような説明を先ず行なうようにしています。

アイヌの伝統工芸としての木彫りに関する参考文献としては、概説的な研究書として佐々木利和『アイヌの工芸 日本美術第354号』（至文堂、1995年）や、日高の沙流川流域を中心とした地域の民具についてまとめられた萱野茂『アイヌの民具』（すずさわ書店、1978年）、などを紹介しています。

また、現代工芸作品に関心があるという場合には、時期や地域にもよりますが、関係博物館や工芸品展などの情報をお知らせしております。

小川正人（研究課・研究職員）

【センター刊行物のお知らせ】

●小冊子『ポン カンピソシ』1－5

1994（平成6）年に始まった「世界の先住民の国際10年」への取り組みの一環として、当センターではアイヌ文化について紹介する小冊子『ポン カンピソシ』を作成しております。

この小冊子はアイヌ文化についての理解を深めていただくとともに、アイヌ文化に関心をお持ちの方々にとって手引きになるよう、様々なテーマで毎年1冊ずつ刊行してきました。

第1冊目に「1 イタク（はなす）」としてアイヌ語を、第2、3、4冊目ではそれぞれ「2 イミ（着る）」（衣）、「3 イペ（食べる）」（食）、「4 チセ（住まい）」（住）、そして今年度は「5 イノミ（祈る）」と題し信仰について取り上げました。



この小冊子は、北海道内の教育委員会、市町村、公立学校（小学校・中学校・高等学校・特殊学校）、国公立・私立大学、図書館・博物館、アイヌ文化関係団体、関係研究機関などに広く配布しております。

●『山田秀三文庫 文書資料目録Ⅰ』

『センターだより』11号でお知らせしましたとおり、この3月に当センターが所蔵する山田秀三文庫の文書資料目録の第1冊目を発行いたしました。山田秀三文庫の資料目録としては図書資料目録、音声・映像資料目録に次いで3冊目となります。今回の目録に収録したのは、各種の文書資料の中から、山田氏の地名調査の記録を中心としたファイル形式のノート類と地名等のカード、併せて205点の資料です。

特に目録の中心となるファイル形式のノートは、山田氏独特の資料と言えるものです。例えば地名に関するファイルでは、調査の事前準備（古文献等の検討など）、現地調査の記録（行程、現地の写真と地図やコメントなど）、事後整理における考察、該当する地域の地図、といった様々な内容が一冊のファイルに含まれています。それらの一つひとつが、またそれらが一冊のファイルに綴じられている状態そのものが、山田氏の研究の方法と特徴をよく伝えています。今回の目録では、通常の資料目録と同様に資料のタイトル、形態、作製年月等の項目を設けたほか、このような資料の特徴を伝えるべく、各資料の摘要を記し、ファイル類については資料の形状の一端を伝えられるように表紙等の写真を掲載しました。

今回の目録に掲載した資料は、点数としては僅かですが、山田氏の調査のとりまとめを行なった資料群であるという点で、他の資料との結節点としての位置を占めるものと考えております。

山田秀三文庫については、引続き、他の文書資料、地図資料、写真資料について整理と目録編集の作業を進めてまいります。山田氏の業績を後世にきちんと伝え残せるような資料整理を目指したいと思っております。

平成11年度後半の主な動き

●『北海道立アイヌ民族文化研究センター 研究紀要』第6号

以下にテーマと執筆者を紹介します。

- ◇論文 北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料
(中) 沖野慎二(北海道東海大学国際文化学部)
- ◇論文 「北海道アイヌ協会」と「全道アイヌ青年
大会」 山田伸一(北海道開拓記念館)
- ◇論文 「北海道旧土人奨学資金給与規程」(1931
年)について 小川正人
- ◇資料紹介 吉田菊太郎資料の中の金成マツ筆録口
承文芸目録 本田優子
- ◇調査報告 松島トミさんの口承文芸 2 大谷洋一
- ◇研究ノート 「クモの神の自叙」の音楽について
～旋律構造とリズム配分を中心に～ 甲地利恵
- ◇研究ノート アイヌ文化の植物観および植物利用
に関する研究文献のデータベース化についての一
提案 貝澤太一
- ◇論文 アイヌ語千歳方言における反復による有音
休止 佐藤知己
- ◇資料紹介 B. ピウスツキのサハリン紀行
荻原眞子(千葉大学文学部)

『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀
要』第6号および『山田秀三文庫 文書資料目録
I』は主に道内外の大学、博物館、研究機関、図
書館、アイヌ文化関係団体などに配布するほか、
北海道行政情報センター(北海道庁別館3階 電
話011-231-4111(内線22-389)または 011-241-7
979)で有償頒布する予定です。

(10月)

- ・日本考古学協会釧路大会(釧路市/出席:古原)

(11月)

- ・第2回センター運営協議会
- ・アイヌ文化講座(根室市教育委員会と共催、根室
市) 講演:荻原眞子氏(千葉大学教授)「「も
の」から見る民族接触—ペテルブルグのアイヌ民
族資料調査報告—」
- ・『ポン カンピソシ 5 イノミ(祈る)』発行

(3月)

- ・SPb AINU PROJECT 研究会(千葉市/
参加:古原・大谷)
- ・記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関
する第2回研究会(国文学研究資料館史料館主催、
東京都/発表:小川)
- ・『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀
要』第6号発行
- ・『山田秀三文庫 文書資料目録I』発行
- ・『アイヌ民族文化研究センターだより』第12号発
行

編集・発行 北海道立アイヌ民族文化研究センター

〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5F

Tel. 011-272-8801(代) Fax. 011-272-8850

開館/月～金9:00～17:00 休館/土・日・祝